勇者な幼なじみと魔法使いな俺

私の戦闘力は53万です

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者な幼なじみと魔法使いな俺

【Ｎコード】
Ｎ８３９９Ｌ

【作者名】
私の戦闘力は５３万です

【あらすじ】
魔法使いである俺、水元　駆は正体不明の魔法陣に引っ掛かってしまい、気づいた場所はなんと城の中！？
そして幼なじみは勇者だったらしい！？国を助けてくれ言われた幼なじみは「駆が残るなら」と爆弾発言！！
お人よしの駆は断りきれず…勇者の補佐として残ることに。

ぶっちゃけ勇者より強い魔法使いの物語。

冒険０　召喚された幼なじみとついでに俺

俺いまは長年の親友である友人Ａと一緒に帰っていた。
俺はあまり頭のよろしくないため夏休みであるのにも関わらず補習という学生にとってまったく嬉しくない地獄を味わって来たのだが……

その前に俺達の紹介をしておこうか。

俺の名前は水元　駆（ミズモト　カケル）だ。最初に言っておくが、俺は……

”魔法使い”だ！！

……うん、わかってたさ！そんな冷たい視線を投げ掛けられることぐらい！！
だから隣にいる親友の友人Ａぐらいにしか話してないし！！でも、その視線は少し傷つい「君は一体なにをブツブツ言ってるんだ？」
「ああ、何でもないよ。伊織」

そうだな、コイツの事も説明しておこうか。コイツは火元　伊織（ヒノモト　イオリ）。名前でわかったかもしれないが、女だ。いわゆる幼なじみってやつだな。コイツは頭がいいにも関わらずこういう補習には自分から参加してくる。そのことについて以前尋ねてみたら呆れ顔で「…君は女心が分かってないな」と返された。ほかの女友達に聞いても「…鈍感」とか、「…伊織ちゃんかわいそう」とかしか返してくれなかった。男友達には殺意の篭った視線を向けられるし……

ま、俺には女心は一生わかりそうにない。

そうそう魔法のことだが……本当のことだ。
俺の家系は魔術師の家系で父親は優秀な魔術師、母親はかなり優秀で有名な魔術師だ。
なんかその方面では伝説残しちゃってるらしい。

そんな両親の血を受け継いだ俺は当然のように魔術師、いや魔術師を越えた”魔法使い”になるべき存在として育てられた。
まあ、そんなことだからまともに両親から愛情を貰ったことなんて

ない。
だが、俺はそれを不幸に思ったことはないし、そういう環境のおかげで俺が魔法の域に達したことは知られてないわけだから。

休話閉題

ところで、俺がなぜこんなことを説明しているかというとだな……

いま、足元に正体不明の魔法陣があるからだ。
これでも俺は魔法使いに達した人間だ、これくらいはわかる。

これは召喚魔法だ。
しかも、相手の意思に関係なく強制的に召喚する悪質な。

俺一人ならば、どうとでもなるんだが……

忘れていたかもしれないが、いま横には伊織がいる。
この魔法は魔術の心得がある程度ないと視認できない。
つまり抗う事すら難しいという訳だ。

なので召喚されたときに離れ離れにならないようにくっついておく必要がある。

だから……

「伊織！！」

あいつが反応する前に優しく抱き留める…
おお？なんか伊織、顔が真っ赤になってるぞ！？魔術の副作用か？
見たところそんな機能はないが……

と、そんなことを考えてるうちに魔法陣が輝きだし、伊織を力強く抱くとさらに真っ赤になった。
だから何故？と思っていると俺達の体はその場所からなくなった…
……

俺が次に目を開いたときは……城の中だった。

冒険０　召喚された幼なじみとついでに俺（後書き）

この小説がみなさんの暇潰しにでもなればと思います

感想書いてください

冒険１　勇者になった幼なじみとついでに俺（前書き）

前回のあらすじ

俺、自己紹介。

魔法陣ドバァァァン！！

気がついたら城の中！！

では、冒険２

勇者になった幼なじみとついでに俺楽しんでください

冒険1　勇者になった幼なじみとついでに俺

俺が目を開くと城の中だった。とりあえず現状確認だ。
見たことない魔法陣だったからな、体に異常は…ないな。
んっ？右手に違和感が……

うおっ！！
伊、伊織！？……ああ、抱き留めたんだっけ？いきなりだからビックリしたよ。
ところで……

「あんたら、何の用だ？」少し威圧感をだすと同時に周りを囲んでいた兵士が警戒体制にはいった。

中の上ってところか……

こんなにも駆が冷静なのは理由がある。

魔法使いに達した駆の絶対的な自信も確かにあるが、なんといってもあの魔法陣か規模に比べて雑だったことだ。あれほど大掛かりな魔術は膨大な魔力が必要になる。だが、あの魔法陣が雑だったので必要以上の魔力が必要になっていた。

見たところ目の前の女性が術者だろうが感じられる限りたいしたことはない。

また、それ以上の術者も周りにいないことが駆に余裕を持たせていた。

「う、う～ん」

「気がついたか、伊織？」

言葉を発しながらも周囲の警戒は怠らない。ここで後ろの者達が攻撃をしてきても即座に対処できる。

「か、駆？なんで君が私の部屋にいるんだ？」

この幼なじみは寝ぼけているようだ。

そう思うと駆は右手を振り上げ……これにより周りの兵士はさらに警戒するが、駆は構わずに振り下ろす！！
ごん！！！！！！！！

「いった～！？なにをするんだ君は！！」
若干、涙目がかわいいと思ったのは秘密だ。
『静かに！！周りをみてみろ』
駆の魔術である念話で頭に直接語りかける。
『ど、どこなんだ？ここは！？』
伊織は魔術師ではなく、ただ駆から存在を聞いているだけなので当然魔術は使えない。なので駆が表層意識から伊織の言葉を読んでいるだけだ。

『わからん。だが、目の前の奴らが原因であることは間違いないだろう。』

どうすべきかな…
駆ならばこの場にいる伊織を除いた人間を殺すことなど造作もない。そのあと転移魔術、もしくは異世界移動を使えばいい。だが駆はおよそ魔術師らしくない人間である。なのでその行動は考えにだしても、実行するきはない。

「あ、あの～」
少し戸惑いながら話し掛けてきた。
向こうから話しかけてきたのなら好都合だと、伊織に目で制する。
「貴方方が勇者様ですか？」

はっ？？？？？？

今、目の前の人間はなんと言った？勇者？
目で伊織に尋ねる。間違いなく戸惑っている。
ということは……
あの魔術は資格があるものを召喚する選定のようなものか？
だとしたら伊織だな……あの魔法陣は間違いなく伊織を中心に発生していた。それに俺が巻き込まれたというところか…。

なら話が早い
「それは恐らく彼女の方だ」
その言葉に伊織が驚く。まあ、当然だろう、彼女にはいきなり親友に勇者だと言われたのだから。

目で謝っておき、話を続ける。

「すまないがどこか話ができる場所に移動しないか？あと状況を説明して欲しい。いつまでも床、それに兵士に囲まれた状態では落ち着かないのだが」

その言葉に女性は

「あっ！すいません。とりあえず応接室に移動しましょうか！」
その言葉に駆は頷く。
そして立ち上がり伊織に手を貸す。
「大丈夫か？伊織」
それに頷き、手をとる。その目には”あとで説明しろ”オーラが漂っていたが。

「では、行きましょう」と言いながら歩いていく。それに駆、伊織はついて行く。手を繋いだままで……
駆にとってその行為自体は何かあった時にすぐ守れるようにだったのだが、伊織にとってはそうではないらしく顔を真っ赤にしている。
今は、そんな場合ではないのだがこれが女心というものか……。

移動中には城の道筋を把握しておく。

少年少女移動中……

で、応接室についての第一声が
「ようこそいらっしゃいました！！勇者様！！」

この人は状況が分かってないのか？説明してくれと言ったはずなんだが……
まあいい。
「すまないが、さきほども言ったように状況がわかってないんだ。説明してくれないか？」

「はえっ？でもさきほど勇者のことを分かっていたみたいですが……」

しまったな…知らないふりをしておくべきだったか。

「ああ…すまない。それは召喚の魔法陣から判断したんだ」

結局正直にいうことにした。どうせ調べられたらわかることだからな…。

「魔、魔法陣から判断って…．アレはかなり高度な魔法陣ですよ？それなのに…」

「俺のことは後回しにして状況を教えてくれ」

「す、すいません、それでは…」

少女説明中……

なるほど、つまり今この国、いや世界が魔王に危機にさらせされていると……

なんだ！？　このテンプレ展開は！？

オーケー、俺。ｃｏｏｌになろう！！落ち着け、落ち着け！！ふぅ～～……

なんだ！？　このテンプレ展開は！？

落ち着けるか～～～～！！！！

長い魔法使い経験でも初めてだぞ！！しかも魔王！？
いや、確かに魔王は存在する。なんたって飲み友達だからな、あれ？俺未成年だよね？
いや、今は置いとこう。それでも世界を救えはないだろう！？
ほら！！隣の伊織も呆れて……めっちゃ目輝いてる！？

「それで、力を貸して欲しいのです！！」
ああっ！！話半分くらい聞き逃したぁ！！
いや、伊織さん？何してんの？なに頷いてんのぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！！！！！！！！
「まて、伊織！！よく考えろ！！そんな簡単に了承するなァァァ！！！！」
コイツは、魔王侮りすぎ！！あいつら半端ねぇんだぞ！！単体で俺くらいの魔力持ってんだぞ！！死ぬよ！？君達マジで死ぬって！！
「大丈夫さ。君が守ってくれるだろう？」いや、まあそんなこと言われたら……ねぇ？し、仕方ないな〜〜／／／
「えっと〜…話続けていいですか？」
うおっ！！！！いたの？？恥ずかしいな〜／／／
「ああ、続けてくれ／／／」
「はい、では続けますと…」

少女説明中……

まあ、つまり纏めますと……

今、この世界は魔王によって危機にさらされている。そして、その危機に対応するためにこの大陸の５大国がそれぞれ勇者を召喚して魔王を倒そうとした。だがいままで召喚に成功したほかの４大国の勇者は全員敗北。そして残りはここしかなく、この国に希望がかかっている。と、

え～～～～～！！！！！なんか責任重大じゃねぇか！！やっぱりやめよう？ねえ、やめようよ！！

そんなに目輝かさないでさ！！帰ろう？帰ろうよ！！だから、その

目はやめて！！

……ああ、もう駄目だ。ああなった伊織はとめられん。覚悟を決めるか、ハァァァァ……

「わかりました、いいでしょう。俺たちは協力しますが……」

「何でしょう？」

「コイツが勇者で間違いないんですね？」
伊織に指を指しながら聞く。

「あっ！そうですね、忘れてました」

忘れるなよ！！
「確認しましょう！だれか！！聖剣を持ってきてください！！」聖剣！？俺は使わないけどなんかテンション上がってくるな！！

伊織の目なんかキラキラとうりこしてギラギラしてるし！！

おっ！きたみたいだな、フム、中々の魔力、それにいくつか固有スキルもついてあるし……うん、いい剣だ！！

「では、イオリ様！抜いてみてください！！」
「うん。わかった！！じゃあ駆？抜いてみるよ！！」
「おう！やってみろ」
そう言うと伊織は少しずつ剣を鞘から抜いていき……
抜き終わると剣が光輝いた！！
「うわ！か、駆！！どうしたんだ、これは？」
「大丈夫だ、伊織。そのまま力を抜いて…そうだ！！そのまま少し待つんだ」
剣の魔力が伊織の体の中へと徐々に徐々にと浸透していく。
その様子を見ながら俺はその聖剣を解析していく。
……フム、本当にいい剣だ、俺の愛刀といい勝負になるな！
剣のランクはＡ＋＋ってところか……そろそろ終わるな。
「ふう～、なんか凄く疲れたよ、駆。」
「お疲れ様、伊織。」
「では、これでイオリ様が勇者で間違いないですね！！よかった～」
それと同時にこの部屋を監視していた気配が遠ざかっていく。

「では、自己紹介をしましょうか。私の名前はリイン・ローレライ・ホーリィシウム。この国で召喚の巫女をしています。リインとお呼びください」

「よろしくリイン。俺の名前は水元　駆。カケルで構わない」

「私は火元　伊織。私もイオリでいいよ」

この瞬間、俺の幼なじみは勇者となった。

冒険1　勇者になった幼なじみとついでに俺（後書き）

かなり疲れたよパト〇ッシュ……

冒険2　決闘を勧めてくる幼なじみとついでに俺（前書き）

文才が欲しい！！！！

すごく欲しい！！！！

では、第二話です

冒険2　決闘を勧めてくる幼なじみとついでに俺

「では、どこからでもきたまえ！！」

え～、俺はいま何故か決闘しています。周りは大臣やら、騎士の人たちが「勇者の付き人か」とか「勝負にならんだろう、まったく女王様は」とか「掛け金締め切るよ～」とか、まて！最後のやつおかしかったぞ！！

原因である親友は俺の横で”ボコボコにしてやってくれ！！”と目で語りかけてくるし！！

なんでこんなことになったんだ？少し振り返ってみよう。

～～回想～～

「では、女王様に謁見しましょうか！！」

えっ！？女王？国の代表か、堅苦しいの嫌いなんだよな～。

「拒否権は？」

期待してないが…一応……

「ないです♪」

そんないい笑顔で言うなよ！！分かってたよ！！

「なにを言ってるんだ君は！！ここで見ておかないと後悔するよ！！まったく」だからお前もそんないい笑顔で言うなって！！

「さあ！！行こう駆！！」

襟引っ張らないで～～～

少女とおまけの少年移動中

そして謁見室にきたー！！！！
はぁ、欝だ。帰りたいよ～
「わらわがこのクロムウェル王国の王女、アニエス・エデン・クロムウェルじゃ！！そなたが勇者か？」
おう！？いつの間にか伊織の前にナイスバ…ゲフンゲフン…女性が話しかけてた！！
「はい、その通りです。女王様」
「リインよ、ご苦労。ところで」
俺をチラ見して、
「この男は誰じゃ？」くそ！！絶対突っ込まれるから嫌だったんだ、あとで説明すりゃ良かったじゃねぇか～
「この人は水元　駆さんといい伊織様と同じ世界の人間です。どうやら召喚に巻き込まれたようです」
その値踏みするような目はやめて！！
「ふむ、使えるのか？」

ああ！！そんなこといわないで！？

「はい、あの高度な召喚魔法陣を一目で見抜きましたから…ある程度の力はあると思います」

「ある程度、ねぇ」

ああ！？ちょっ、そんな言い方したら

「なら試して見ますか？私の幼なじみの力」やっぱり～！！そんな言い方したら伊織が怒るんだから。

「フッ、面白い！！いいだろう」

「いや！！お断りしまｓ」

「おい！！ティミド！！いるか？」

誰？

「ここに」

うお！！いきなり現れた！！

まぁ、気ずいてたけど……

「この者の腕前を見極めてやれ！！」

「だから、お断りしまｓ」

「御意！！」

話を聞けーーーー！！！！
なんで俺の周りは人の話を聞かない人ばかりなんだ！！
「では中庭に行きましょう！！」
リイーーーーン！！！！！！裏切ったなぁ！！！！！！！！！！
「さあ、行こう！！駆」
もうなんでもいいです……

少女たちと青年ついでに少年移動中

ハッ！！いつの間にか中庭に！？しかも右手に剣が！？

で、最初に戻る、と

「こないのか？なら、こちらからいくぞ！！」ふう～、仕方ない。
何個リミッター外すかな？
よし、二つほど外すか、と外し終わったところで

「はあ！！」

掛け声と同時に剣を切り落ろされる！！

！！中々の速さだ、だがこの程度の速さなら！

そうして、バックステップで余裕を持って避ける。

「まだまだ！！」

凄まじい追撃を放ってくるティミドの攻撃を今度は全て紙一重で避ける
端からみれば優勢なのはティミドの方なのだが、
本人たちからみると

（くっ、全て見切られている！？）

と、むしろ優勢なのは駆の方であり尚且つ駆はいま、

（今日の晩飯なんだろな～、こんなデカイんだから豪華なんだろうな～）

などとまったく別のことを考えてたりする。

ぐ～～～

（駄目だ、腹減った！！さっさと終わらせて飯にしよう！！）

そう思った瞬間、駆は既に常人には視認すらできない速さで前に詰める。

「なっ！！！！！」

かろうじて反応するがもう遅い。なにをする間もなく、

ドオォォォォォン！！！！！！！！

鎧など気にせず拳を振るった！！その衝撃をモロに受けた騎士は文字通り吹っ飛んでいく。そして壁にぶつかり本日二度目の轟音が城に響いた。

そして、その光景を見て駆は……

「やっちゃった☆テヘ」

と、まったく悪びれていなかった。

先程の騒ぎのあと俺達は再び女王に呼ばれた。

「そなたらを呼んだのはわかっているとは思うが、先程の件だ」

（ああ、アレね。中々飛んだよな～、死んでなきゃいいけど）

「駆、お主にも力を貸して欲しいのだ！！先程の件でお主の実力はわかったからな」

（えっ！？１００分１の力もだしてないのに？）

先程の闘いは駆にとっては遊びにもなっていなかったのだが、その

せいであの場にいた伊織を除いた全員が駆の実力を見誤っていた。
「そなたと闘ったあの者はティミドといってな、我が国の騎士団の第３部隊部隊長を務めておる！！それを倒した主ならば周りの狸爺どももなにも言わないじゃろう！！」

(俺には凄いのか、凄くないのかよくワカンナイなぁ～)

そう思っているのがわかったのか、微妙な顔をしていた俺の耳元で
「ティミドさんは１８歳という若さで部隊長になった優秀な騎士なので、それを倒したカケルさんの評価は今のところ高いんです………って、伊織さん！？何故そんなに睨んでくるんですか？わたし何か悪いことしましたか？」

リインが怯えていたので後ろを見たら……阿修羅がいた。比喩じゃないんだ！！本物の阿修羅が…………

「駆？君は何をリインと顔をくっつけているんだい？」
ぎゃ～～～～～～～～～～～！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！「ちょ、伊織さん！？ホントごめん！許して、許してください！！その後ろのオーラをしまってくだ、ぎゃ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！！！！！！！！！！！」
駆は目の前が真っ暗になった………

目が覚めたら何故かフカフカのベットに寝ていて、そのうえ……

……

隣に伊織がいた

冒険2　決闘を勧めてくる幼なじみとついでに俺（後書き）

あえていおう！！文才が無いと

俺がね

冒険3　暴走する幼なじみとついでに俺（前書き）

中々更新できませんでしたがようやく更新出来ました！！

冒険3　暴走する幼なじみとついでに俺

伊織が横で寝ていた！！

引っ張ってしまったがこんなことは昔からだったのでいまさらだ。

とりあえず起こそう。

「伊織、さっさと起きろ」

体をゆさゆさと揺さぶる。

「……おは…よう。駆」

「おはよう。伊織。ところでなんで俺と一緒に寝てんだ？」

「気分だ」

気分か～。なら仕方ないな。

「そういや、あの後どうなったんだ？」

「そのことだが、君が気絶した後にアニエスとリインとで話あったんだが…」

フムフム、てかいつの間に女王のこと名前で呼ぶようになったんだ？

「向こうから頼まれたんだ。あと君にも名前で呼んでくれだと……

……ライバル増えたか？」

「んっ？最後の方なんて言ったの？」

「なんでもないよ」

わ、わかった！！わかったからそのいい笑顔はやめて！！

「わかればいいんだ」

あれが俗にいう暗黒微笑か……こ、怖かった～

「まあ話の続きなんだが…」

うん。続けて、続けて。

「とりあえずはこの城に残り訓練をすることになった」

「え？いますぐ旅とかじゃないの？」

「ああ、君はともかく私は剣術を少しかじった程度の素人だからね。

昨日、その話をしたらまずは訓練だと言われてしまったよ」

「はあ～、まあ妥当な判断だな。」

「あと、君にも訓練があるらしいよ。わざわざ魔術師師団長がつけてくれるらしいからね」

「今更必要ないんだが…」

「まあそういわず頑張って実力を隠しておけばいいさ。」

「あ、気ずいてた？」

「何年君と一緒にいると思うんだい？それに私も同じように魔術を習うからね」

「絶対俺の方が教えるの上手いと思うんだけどな」

「まだ見てもいないだろうに……まあ教えてくれるのは助かるかな。……出来れば二人きりで」

「別に構わないが？」

「い、いや。私たちはま、まだ17歳だしそれに……／／／」

「お～い、帰ってこ～い」

「ブツブツ…いや、君がいいなら私も。い、いやまだ清らかな付き合いが……」駄目だコイツ…どこかに旅立ってるし。

そんなことを思っていると

ガチャ

誰か入ってきた。

「イオリ様、カケルさん、朝ですよ〜」

リインか、

「おはよう、リイン。今日も元気だな」

「おはようございます！！カケルさん。わたしはいつでも元気ですよ？」

「ああ、そうだな」

「ところでイオリ様は？」

「いまは旅立ったばかりだ。夢の中へ…」

言いながらブツブツ言ってる伊織を指指す。

「イ、イオリ様……ハ、ハハ」

乾いた笑い声しかでない。

そろそろ可哀相なので正気に戻す。

「伊織、伊織！！帰ってこ〜い」

「ハッ！！私は一体なにを？」

伊織が帰ってきた

「おはようございます、イオリ様！！」

先程のことはなかったことにしている！？リイン中々は空気が読めるな！！

「あっ！おはよう、リイン」

「そろそろ朝ごはんですよ。早く行きましょう！！」

なに！？ご飯だと！！

「よし、行こう！！さて、行こう！！さっさと行こう！！」

昨日からなにも食ってなかったからな

「そうだね、行こうか？駆」

メ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜シ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜だ〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！！！！！！

〜〜少女達とおまけに少年移動中〜〜

「メ・メ・メシ、メシ〜！！白米さえあれば〜♪」

昨日からなにも食べてない俺は自作の歌を歌いながら上機嫌で向かう。

「な、何ですか？その歌」

「ご飯の歌だ！！俺はパンより米派だからな！！」

今の俺なら米さえあれば何でもできる！！……気がする。

「ちなみにここは洋食だよ？」

ピタッ！

「えっ？ い、今なんて？」

「だから、昨日はお米なんて出てこなかったよ？」

な、なななななナナナナNANANANAななな☆NA☆何だって～～！！！！！！！！！！！！！！

「あの～、KOMEってなんですか？」

「えっ！？ い、いまなんて？」

「ですからKOMEなんて聞いたことないんですけど…」

「そんなばかな！！！」

米がこの世界に存在しないというのか！？

「はは……もう生きる気力をなくしたよ。死のう」

「ま、待つんだ！！駆。考え直すんだ！！」

「そ、そうですよ！！　あっ！！もしかしたら東方のジパン

グにならあるかも！？」

な、なに！？

「それはこの世界でも米が食えるということか！」

「は、はい……多分」

「そうときまればメシだ、メシ！！」

そうしてなんやかんやでメシを食った！！

「ではこれから訓練をしましょうか？」

「わかった」

「だが断る」

「「……」」

ご、ごめん伊織！！やる、やります！！やりますから！！その目はやめて！！その関節はそれ以上曲がら…ぎゃーーー！！！！！！！！！

「では、気を取り直して」

うう、痛いよ～（泣）

「何から始めます？」

「魔法！！絶対魔法！！」

や、やばい。伊織の目が…キラキラしてる！！

まあ、いいか。

「では、移動しましょうか」

「だが断「駆？」…らないよ！？」

怖！！

〜〜少女達とおまけに少年移動中〜〜

何か教室みたいなところの前に来た！！

ノックをしようとするリインを制して、伊織は……

「たのも〜！！」

いきなり扉を勢いよく開けた！！

「なにしとんじゃ〜〜！！」
俺は伊織に渾身のツッコミをいれた。
ツッコミのせいで俺と伊織の位置が入れ代わる。
そして目の前に鼻血を出して倒れている爺がいた。

冒険3　暴走する幼なじみとついでに俺（後書き）

疲れた……

登場人物設定（前書き）

更新が遅くなりました。

登場人物設定

俺の設定

【名前】

水元　駆（ミズモト　カケル）

【年齢】

１７歳

【容姿】

黒髪黒眼。顔は上の中、ツリ目で前髪は眼のところに届くか、届かないかくらい。（エリアの騎士の飛鳥亨をイメージしてください）身長１８０ｃｍくらい。

【階級（クラス）】

魔術師（本当は魔法使い）そこらの相手なら、小指で倒せるが、実力を隠している。

【能力】

魔法全系統。詳しくいうと基本系統の火・水・土・雷・風の５系統に上級系統の光と闇。補助系統の治療など。そして魔法使いの域に達した者しか使えない創造・破壊・空間の三つ。経験によって、剣

術、体術が達人クラス。空間には主に日常生活に必要な物、サバイバル用品、食料などをいれる便利空間になっている。

【ステータス】

筋力：B＋＋
耐久：A＋
魔力：EX
幸運：E
俊敏：A＋

俺の幼なじみの設定

【名前】

火元　伊織（ヒノモト　イオリ）

【年齢】

17歳

【容姿】

少し茶色がかった黒髪。（ハルヒの長門くらいの長さ）幼さが残った顔。身長１５５ｃｍあるか、ないかくらい。

【階級（クラス）】

勇者。剣術を習っていたので中々強い。

【能力】

剣術。魔法。勇者なのでどちらもバランスよく使える。

【勇者の固有スキル】

浄化。呪いなどを解除できる、ほかにも邪悪な気に汚染された生物、物なども解除可能。（駆もできるが他の人間には不可能）

【ステータス】

筋力：Ｄ
耐久：Ｃ＋
魔力：Ｂ＋
幸運：Ａ
俊敏：Ｂ

召喚の巫子の設定

【名前】

リイン・ローレライ・ホーリィシウム

【年齢】

１６歳

【容姿】

金髪で腰の辺りまで伸ばしたストレートのロングヘアー。キレイよりカワイイが似合う。天然

【階級（クラス）】

召喚の巫子兼魔術師

【能力】

魔法、基本５系統の中では水・雷・風が得意。上級は光。

【召喚の巫子の固有スキル】

勇者召喚。選ばれた勇者を召喚できる。また、その際に使用する魔法陣は書くのに三日、呼び出す時に魔力をほぼ全て使ってしまう。

【ステータス】

筋力：E＋
耐久：D
魔力：A
幸運：B
俊敏：C

冒険４　訓練する幼なじみとついでに俺

何故かいま俺は

ガガガガ、ガン！！ガガガガガガガガガガガガガガガン！！

ドゴォン！！

爺と闘っています。

「くっ！！中々やるの！！」

「…どーも…」

えっ？なんで闘ってるかって？簡単に説明しよう！！

・爺、鼻血出す
・爺、切れる
・俺に言い掛かりをつける
・ならば勝負だ！！

こんな感じ！！

「くらえ！！『烈風』！！」

不可視の風の塊が俺に向かって放たれる。
だが、この程度、

パァン！！

不可視の風を魔力を乗せた拳で弾く。

「！！」

目を見開く爺（笑）

「くっ！！『灼熱』！！」

丸い拳大の炎を無詠唱で放つ。

「…『水弾』」

俺はそれに対してそれの軽く二倍はある水の球を放つ。
それは蒸発し、水蒸気が互いの視界を覆う。
だが俺はそんなものには構わず

「はあ！！」

一足飛びで相手の懐に忍び込み思いっ切りぶん殴る！！

「あべし！！」

世紀末な叫びと共に飛んでいく爺

それで終わらせないのが俺クオリティー！！
飛んでいく爺に一瞬で追いつき…さらに殴る。

これはクリリンの分だー！！

……

結論からいうとやり過ぎた

「聞いてるんですか？カケルさん！！」

ただいま絶賛説教中です☆

そして何故か後ろから無言のオーラをだしてくるやつもいるし……

「でも、あっちから仕掛けてきたんだし…」

「やり過ぎなんです！！」

「しかしですな…「や・り過・ぎ・です！！」…はい」

俺には逆らえない！！

「とりあえず謝ってきてください！！」

「イエス・サー！！」

何回でも言おう。俺には逆らえない！！、と

と、言うわけで医務室へＧＯ！！

〜〜少年移動中〜〜

俺はいま医務室の前に来ている。

どうしよう……

こういうときは、勢いが大事だよな！！

「たのも〜！！」

バァン！！！！「グハァ」

……えっ！？……

チラッ

うん、鼻血出してる爺がいたよ……

…逃げよ☆

「では、魔法の訓練から始めましょう！！」

そう、いまから訓練だ！！

爺？誰それ？

「魔法とは、簡単に四種類に分けられます」

そう、いまからなんと言おうと訓練なのだ！！

爺？だから誰それ？

「まず基本系統の火・水・土・雷・風です。これは習得自体は以外と簡単にできるけどその後の練度を高めることが大切です。」

フムフム、ここは俺の世界と変わらないな。
ただ…習得は簡単じゃないと思うのだが……
ま、まあいい！！次だ、次！！

「その次は上級系統の光・闇ですね。これは習得自体も難しいのですが、練度を高めることも難しいです」

「ほかには？」

イオリ…そのギラギラした目をやめろって

「あとは補助系統ですね。主に回復などです」

「ほかには、ほかには！？

だからイオリ、そのギラギラした目をやめろって

「いえ…ですがこれは実在するかも怪しいのですが…」

「ですが？」

「古代系統の創造・破壊・空間ですね」

えっ、それ俺使えるんだけど……

「まあ、所詮伝説のものですよ」

やべ～、これ俺使えることがばれたら……
伊織がこ　っ　ち　見　て　る！
「い、伊織さーん？なんでこっち見てるんですか？」
「いや、別に～」
くっ！！あいつ気付いてやがる！！どうすれば……
「ナニヲイッテルンデスカ？イオリサン」
「カタコトになってるよ～、カ・ケ・ル～？」
「さあ！！訓練をしようじゃあないか！！伊織君」
「……まあいいけど…」
よし！！話を変えれたぞ！！
「あっ、終わりました？じゃあ訓練始めましょうか！！」

「そして訓練場に着いたのだった」

「なにを言ってるんだ？駆」

「気のせい、気のせい」

そう、変な電波なんて受信していない！！

「ではまず、基本系統の練習しましょうか！！」

「はい！！」

伊織は元気だねぇ～。

えっ？俺？隅の方でじっとしてるよ～。勇者は伊織だからね。見学さ、見学！！

決してサボりではない！！

ほ、ホントだぞ！！

「では講師を紹介しましょう！！ゼルクさん、出て来てくださーい

！！」

ゼルク？誰それ…………………………って、ああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

あの爺じゃん……

冒険5　訓練している筈の幼なじみとついでに俺1（前書き）

遅くなりました！！すいません

しかも今週テスト週間なので更新できません

冒険5　訓練している筈の幼なじみとついでに俺1

いま俺は城下街を歩いている。
なんで？訓練は？ＯＫ，ＯＫわかってるさ、君達の言いたいことは。
でもね、でもね、あんな厳しい視線を浴びせられたら……ねぇ～。

まあ、目的がないわけじゃあないんだ！！
なんとね、ギルドに行こうと思うんだ！！
あっ、一人でだよ。

でも、歩くたびにそこらの屋台からおばちゃんが「やあ、お兄ちゃん。買っていかないかい！！」とか言われて荷物がいっぱいなんだよ！！

おっと、話が脱線したな。
まあ、ギルドって言ったら男の憧れだしな！！

さあ行こう！！！！

あっ、伊織は訓練だよ！！

さあ、着きました！！ギルド！！

どこで受付かな～
あの女の人に聞こう。

「すいませ～ん。ギルドに登録したいんですけど…」

「はい、新規加入の方ですね？」

うおっ、見事な営業スマイルだ！！

「それではこちらへどうぞ」

そう言って横の部屋に案内された。

「ではこちらの紙に記入していってください」

え～と、なになに…
・名前…水元　駆
・出身地…不明
・年齢…１６歳
・タイプ…魔法剣士

こんなもんか！！

「書けましたか、ではこちらに手を置いてください」
言われた通りに水晶に手を置く。

ポワ～って光る水晶。
これはランクか、何かを計るものだろうな～。まあ、魔力は抑えているし、大丈夫だろ！！

「出ました！！ランクは……Ａ……ですね……」

基準がわからないからなんとも言えないな。
でもこの受付の人が驚く顔は始めて見たな…

「ランクＡって凄いんですか？」

「凄いもなにも、新規加入の方はほとんどＧかＦですよ。よくてＥくらいですから最初からＡなんておそらく史上初ですよ！！」

あ～、やっちゃった☆
まあいいとしよう！！

「ではギルドの説明をしますね」

立ち直り早！！

「あなたは今よりギルドの一員となりました。ですのでこのカードをお持ちください」

なんの変哲もない普通のカードをもらった。

「このカードの魔法陣にあなたの血をつけていただきますとあなたの情報がカードに登録されます」

早速つけてみる…うおっ！！俺の血から魔力が吸い取られていく！！

「このカードがあればどの支部でも依頼を受けることができます」

ほうほう

「また身分証明証にもなりますのでお使いください。ですが紛失なさると再発行に銅貨３枚必要ですのでご注意ください」

それは便利だな、俺や伊織にとっては。

「次に依頼についてご説明いたします」

キターーー！！！！！

待ってました！！正直カードとかどうでもよかったんだよね～

「依頼は簡単にＳＳ～Ｇランクに分けられます。依頼は自身のランクと同じ、もしくは１上のランクか、１下のランクを受けれます」

俺はＡだからＢとＳだな！！

あれ？なんか早くね？

「説明としてはこのくらいですね。なにか質問はありますか？」

「今から依頼を受けたいのですが何かありませんか？」

受付さんは少し考えて

「あなたのランクですと、ここらへんですかね」

どれどれ…

・依頼主　村人Ｌ
依頼内容　ヴェアウルフの群れ討伐
場所　タルル村東の森深奥
報酬　金貨３枚

※ヴェアウルフ…ランクＢ相当の魔物。個々の強さもさることながら５匹ほどの群れだとランクＡに相当する。

討伐か～

「このタルル村って行くのにどのくらい繋かりますかね？」

「そうですね、だいたい馬で半日くらいのところですね。」

「あんがい近いですね」

「基本ランクＣ以上の魔物は奥地にこもってますからね。このよう

に深奥とはいっても珍しいんですよ」

「なるほどね、わかりました！！これにします！！」

「はい、ではギルドカードを提示してください…はい、確かに受け取りました。では、ご武運を！！」

さよ～なら～

そういえば俺武器持ってない！！受付のお姉さん言ってよね！！

早速買いに行こう！！

やって来ました、武器屋！！

これぞファンタジーって感じだな！！

「へい、らっしゃい！！」

八百屋か！！ここは！！

「なにをお探しで？坊ちゃん」

「ああ、少しね」

さて、見て回ろうかな。掘り出し物でもないかな～！！

探・し・中☆

うお！？この剣呪われてる！！

しかも無駄に高度な呪いだし！！

能力も高いし…買おう！！

「すいませ～ん、この剣欲しいんですけど～」

ちなみに西洋剣だよ☆

「えっ！！これを…ですか？ホントに？」

「ああ、…だから割引してくれよ！！じゃないと…ばらすよ」

「もしかして…わかってます？」

「割・引しろ」

容赦しないぜ！！俺は！！

「では、コレで」

「いや、コレにしろ」

「そんな！！そんなに引いたら赤字ですよ」

「いや、コレでもぎりぎり黒字になるはずだ！！ば・ら・す・よ」

「わ、わかりましたよ～」

よし！！勝った！！

たたいま移動中

いま目的地のタルル村目指して移動中だ！！

ちなみにさっき買った呪いの剣は背中にかついでますよ。

ただいまの俺の装備は

・呪いの剣

・魔法使いが着るっぽいローブ

・スニーカー

うん、完璧だな！！

この装備なら例えドラゴンが出て来ても大丈夫だな！！

「暇だな～、あと3時間は繋かるよな～。話し相手が欲しい！！」

マジで暇だ！！

「なら某が話し相手になろうか？主」

「ホント！？ありがと
……んっ！？誰？」

マジで誰？

「某は某だ。いま主が背中にかついでいるだろう」

えっ？背中？

「ま、まさか…剣？」

「そうだ。主よ。某はあなたを新しい主と認めた。よってあなたが主だ」

まさか、呪われてたからってノリで買ったやつなのに人格を持った剣なんて…
解析しとけばよかったＯＺＴ

うん、今からでも遅くないはずだ

「お～い、剣。いまからお前を解析するぞ～」

「ぬ！！主、まさか某にあんなことやそんなことを！！」

「てい！！！！」

ガツ！！

剣を思いっ切りたたき付ける！！

「痛！！なにをする主！！」

「お前が馬鹿なことを言うからだ！！あと、ぬ！！ってなんだ！！ぬ！！って」

まったく何だ？この剣は

「まあいい、解析するぞ？剣」

「某には黒剣と言う立派な名前があるのだぞ！！主」

それ名前か！？

「わかったから解析するぞ！！」

”解析・開始”

・黒剣

能力　空間切断　主が切ると願ったものを切ることができる

※剣が主と認めた者しか抜くことができない

「…凄いハイスペックだな、お前」

「ふふん、見直したか主」

「ああ、見直した」

マジで凄いぞコイツ

「そうだ、お前のことはなんて呼ぼうか？」
「主の好きに呼んでくれればよい」
ん～、なら
「よし、黒剣だからクロ！！お前は今日からクロだ」
「安直だな…だが、ふむ…中々いい名だ」
「だろ！！」

そうしてなんやかんやで村に着いたのだった！！
「それでいまは森です！！」
「なにを言ってるんだ？主」
「なんか電波を受信したんだ」
「はあ？」
「まあいいじゃないか！！」

まあ、とりあえず森に着いた訳だ！！村では歓迎されたと言っておこう。
ローブに剣で怪しまないのかな？と思ったけど大丈夫だった。
「さあ！！いまからヴェアウルフを探す訳だが…ヴェアウルフってどんなやつ？」
「主？まさか…」
「うん、まったく知らない」
「はあ」
ため息つくと幸せが逃げるぞ、クロ
「誰のせいだと…まあいい、ヴェアウルフとは、名前の通り狼のような外見の魔物だ」
「あんな感じ？」
「そうそう、あんな感じ…って、あれだーーー！！！！」
「大きな声出すなよ、クロ！！まあ、クロを使っての初戦闘だ、いくぞ！！」
俺は素早くクロを抜き、ヴェアウルフの群れに突っ込む。
反応する前に手前の二匹を
ーーー斬ーーー

真っ二つに切る！！
ようやく反応した残りの三匹の内二匹を
ーーー轟ーーー
蹴り飛ばす。グチャリと嫌な音と共に残りの一匹もろとも吹き飛ばす！！
あとに残るは俺だけ。
俺は素早く剥ぎ取りをすます。…損傷が激しくあまり剥ぎ取れなかったが
「終わったな」
一息つきすぐさま次の群れを探す。

いくつかの群れを討伐していくうちにいつの間にか森の奥まで来てしまった。
だんじて迷子ではない！！ホ、ホントだぞ！？
さて、どうやって村まで戻ろうかと考えていたら
バッサバッサと何か音がする。ついで俺は大きな影に覆われる。
なんだ？と上を見上げると…

ドラゴンがいた☆

冒険６　訓練している筈の幼なじみとついでに俺２（前書き）

テスト週間なのに書いてしまった！！

まあ息抜きだと思えば…

はあ

冒険6　訓練している筈の幼なじみとついでに俺2

前回のあらすじ

漢の憧れ！！ギルド到着！！
依頼を受けた！！
森で一暴れだ！！
ドラゴンキターーー！！！！！

こんな感じだな！！

まあ現在進行形で目の前にドラゴンがいるんだけどね☆

だが、我等人類は言葉という最大の文化がある！！

まずは平和的に言葉で解決だ！！

「ヘロー！！ないすとぅーみーとぅー、マイネームイズカケル・ミズモト！！ハーワーユー？」

グォォォォォォォォ！！！！！

怒っちゃった☆

「ドラゴンさんたら照・れ・屋さん（ハァト）」

グォォォォォォォォォォォ！！！！！！！（訳・なめとんのか！！ゴルァァ！！）

仕方ないな、本気でキレてるっぽいし真面目にやるか。

まあ、見たところドラゴンの中でも下位種だから余裕だな～

真面目にやるけどさ。クロが五月蝿いし。

「来いよ、下等生物！！誰に喧嘩売ったかを教えてやるよ！！」

言い終わると同時にドラゴンが火のブレスを放ってくる。

あれだ、リオレウスを思い出せ。あんな感じだ。

ブレスを俺は当然避ける。

避けると同時に相手（ドラゴン）との距離を一気に詰める。

そして魔力で強化した身体能力をフルに使い

ーーー斬ーーー

相手の顔を切り付ける。下位種とは言え相手は生物の頂点に君臨するドラゴン。簡単にはやらせてくれない。

ドラゴンから一度距離を取る。
そしてすぐに距離を詰め、切り付ける。
今度は離れない
ーーー斬、斬、斬斬斬斬、斬ーーー
相手に休む暇など与えない。何度も、何度も、切る。ただひたすらに、切る！！
ドラゴンが怒り吠える。
グォォォォォォォォォ！！
そんな雄叫びには耳を貸さない。
相手の命を断つまで、切る
斬りつづける
（イケる！！）
勝利を確信した俺は、
（そういや、クロの空間切断って使ってないな。使ってみよう）
この剣は所有者の斬りたいと願うものを切る。
ならば

目の前のドラゴンを縦にまっすぐ切断した～い☆
と、願いながらクロを振り下ろす。
すると、
「グァ？」
ドラゴンが真っ二つになっちゃった☆
え～～！！！？？？？
なんて見事な真っ二つさ！！
血が！！血がピューピュー突き出してる！？
そのうち少し痙攣していた元・ドラゴンは力尽きていった…
「あ、あのさ～、クロ。お前って凄すぎじゃね？」
「い、いや、某もあれほどとは…」
ＭＡ・ＺＩ・ＤＥ！！
「ていうか、お前自分のことだろ？なんで想定してないの？」
「某の切れ味は主の魔力によって増減するから……まさか主があれほどとは思わなかったのだ」

ああー、確かに吸ってたな、俺の魔力…

そんなことより

「コレどうする？」

コレとは、もちろん目の前の二分割された元・ドラゴンさんのことだ☆

「とりあえず取れる素材は剥ぎ取っておいたほうが良いのではないか？」

まあ、それはそうだな…

～～～剥ぎ取り中～～～

鱗やら牙やらを剥ぎ取った俺の前にはえっ、なにこれ？デカイ蜥蜴？みたいな感じになってるドラゴンさんしかいない

「それじゃ、村に一度戻ろう！！」

ドラゴンの肉は意外に旨かったと言っておこう

村に戻った俺は証拠の素材を村長に渡し、報酬を貰う。少しだけ狩りすぎて、素材の数を見た村長とその他が腰を抜かしていた。

俺は化け物かっつうの！！

ちなみにドラゴンのことは言ってません

言ったらめんどくさそうだからな…

そういえば、魔王の噂とか一つも聞かなかったな…

ホントに存在するかどうかも怪しいやし…

まあ、帰ってリインに聞けばいいか！！

帰ろう！！

実は俺、歩きじゃなくて飛んでんだよね

魔力に風属性を持たせて、俺の体を浮かせながらさらに方向を指定する。

意外に難しいんだ！！これが！！

誰に説明してんだ？俺？

一人で説明とか悲しい！！

スピードアップだーー！！

むっ！！なんか見た感じ盗賊っぽい奴らが馬車を襲ってるぞ！！
これは正義の味方の俺が助けないと！！
※今の駆はテンションがおかしいです
スタッ！！という擬音が似合う感じで着陸する。
「おい！！悪党ども！！この俺が成敗してくれる！！」
※重ねて言うと駆はテンションがおかしいです
「な、なんだテメエ！？」
「ぶっ殺されてえか！！」
と、騒がしい盗賊ども
「なんだ！？新手か？」
馬車の人達も警戒してくる
「うるせー、テメエら！！」

これは両方に言ってます！！

「これはテメエらが悪いんだな！！そうなんだな！！」

盗賊奴らを指指す。

「いや、違うぞ！！これは正義の為の行いだ！！」

えっ？それって…

「この兵糧が王都に届くとそれは則ちクロムウェル王国の力となる！！だからこれはクロムウェルの兵糧を断つための作戦だ」

マ～ジ～で！！

「お言葉ですがこれは兵糧なんて大層なものではありません。町の商人から注文された食材でございます」

フムフム、ということは…

「悪いのはテメエらじゃねえか！！」

渾身のツッコミをいれる！！もちろん魔力強化付きで！！

結構ダメージを受けつるみたいだ…

「クソッ！！どうしても邪魔するきか！！」

いや…ノリで

「野郎ども！！戦闘準備だ！！」

ジャキ

なんかリーダー格っぽい奴の号令でいっせいに武器を構える

4・5人くらいいるな…

はあ～、逃げようかな～

でも後ろの馬車軍団が期待した目で見てくるしな～

仕方ないか、なんかさっきまで異様にテンションが高かったしな～

今凄い低いけど…

「うおら！！」

そうこう考えてるうちに盗賊っぽい人達の一人が切り掛かってきた

うん、おそ！！

少し左に避けて足をかける

ズザザザァーーーー！！

顔面から滑ってった！！コ、コイツできる！！体を張ったボケなんて！！恐ろしい子！！

「い、痛い」

男の涙目！！キモッ！！

「テメエ！！この野郎！！」

今度は3人がいっせいにきた！！

だが、俺は

「うおりゃ！！」

真ん中のやつを本気で蹴る！！

ドゴォォォン！！！！

凄い速さで跳んでいき、岩山に激突する

ほかの2名は武器を振り上げたまま止まっている

あっ！！こいつら凄い冷や汗を流してる

ギロッ

少し睨みつけると、

ダダダダダダダダ

半端ない速度で走って逃げた！！

ただ、

「あんな化け物相手に出来るか！！」とか

「人間じゃねぇーーー！！」

とかいうのはやめて…

結構本気で傷つくんだ…

俺はそこで今まで空気だった後ろの人達に

「大丈夫ですか？」

と声を架ける

ダダダダダダダダッ！！

こっちも逃げた！！酷い！！

……帰ろ…

飛んで帰りま～す

俺は帰ってきた！！！！

報酬は現地で貰ったからギルドには行かなくていいな

じゃあどこに行こう…？

リインには一週間帰ってこなくていいです、とか言われたからな…

情報集めでもするか！！魔王のことも聞きたいからな

ならどこに行くか…

やっぱ情報集めと言ったら酒場だろ！！

というわけで酒場へＧＯ！！

ここが酒場か……

あんなに迷うとはな…

おそるべし！！酒場！！

ここの人達、みんなエエ人や！！
しかしイメージ通りの外見だな……
いやいや、これこそ俺の望んだファンタジー！！
気を取り直して…入ろ！！
ガチャ
うお！！ガラの悪いオッサン達がめっちゃいるんですけど！？
「何を注文だい？」
こ、これはなんて素晴らしい髪型のマスターだ！！
「フム、ミルクで」
「ワハハハハ！！！！」
中々予想通りの反応だな、このオッサン達
「ボウズ、ここはガキの来る所じゃあねえぞ」
また素晴らしい髪型なことで
「はいよ、ミルクだ」
このマスターステキだ！！

「ハハハ、ミルクなんて飲むお子様は家に帰ってママにでもあまえてな！！」

あえてスルーします

「おい！！聞いてんのか！！ガキ」

スルー、スルー

「ビビって声も出せねぇのか」

「うわ、口クサ！！」

「なんだと、ガキ！！」

あっ、声に出ちゃった☆

だって臭かったんだもん

「大人しくしてりゃ付け上がりやがって！！」

いま、マジで臭かったんだよ！！

「くらえ！！」

いきなりパンチかよ、オッサン！！

後ろを見ずにパンチを掴み

パシ

引き寄せて

グイ

裏拳を打ち噛ます！！

「ぐはぁ！！」

うわあ、酒場の外まで吹っ飛んだ！！

「テメエ！！よくもアニキを！！」

うわ、今時アニキとか！！

てか酒場にいるほぼ全員が立ち上がったし！！

バキ、ドカ、ボコ、ポイ↑（店の外に投げる音）

「いい汗かいたぜ！！」

「ゴメンな、マスター。店壊しちまったよ」

いやマジで、扉とか半壊してるし

「なあに、あいつらに直させるさ」

あいつらとはきっとあの憐れなチンピラどもだろう

マスター、意外に鬼だ！！

「そうそうマスターに聞きたいことがあるんだけど」

「なんだい？」

「最近召喚された勇者のことなんだけどさ…」

「勇者様？ああ、今代の勇者様は可愛らしい女の子らしいな」

「うん、それでさ魔王ってホントにいるの？」

「さあ？確かに実際に見たなんて人はいないが最近の魔物の活発化は魔王のせいなんじゃないかってのが国の発表さ」

「ということは別の何かが原因かも知れないってことか…」

「まあ、そういうことさ」

なら何故リインはあんなにも自信をもって魔王退治をしてくれなんていったんだ？

何か裏がありそうだな…

俺はそのまま釈然としないまま城に帰った

冒険7　魔術を一つ習得した幼なじみとついでに俺（前書き）

かなり短いです。

冒険7　魔術を一つ習得した幼なじみとついでに俺

城に帰ってきて俺はリインに会うために伊織が修業しているはずの練兵場に向かった。

実はギルドに行ってからまだ二日しかたってないのだが、何もすることがないので帰ったんだ。

いまは幼なじみの訓練を見ようと思っている。
急ぐことでもないのでゆっくりと歩いている。

この高そうな壺を盗んで売ろうなんて考えていないぞ。ホントだからな！！

まあ何はともあれ伊織に会いに行こう。

そうして少し歩いていき目的地である練兵場の前まできて勢いよく飛び込もうと考えていたら

ドゴォォォン！！！！

と、凄い音がした。
そのすぐあとに『伊織様、大丈夫ですか？』とか聞こえてきたので帰ろうかな、と一瞬マジで思ったけど入ることにした。

そこで見たのは穴だらけになった練兵場と倒れている兵士達だった。
思わず「なんでさ…」と某正義の味方の口癖を言った俺は悪くないはずだ。

とりあえず二人に近付こうと思い、駆け寄る。

「大丈夫か？」

煙だらけだが、間違いなくこの二人だろう。

「あれ、駆？どうしてここに？」

不思議がる伊織。まあ、確かに早く帰りすぎたけど、
「ああ、これはもうお迎えがきたのか…、駆の姿の天使なんて神様も気が利くじゃないか」

「うおーい！！まだお迎えは早いよ、てかリインも『あれ、おばあちゃん？その川を渡ればいいの？』とか、言うなーー。そして、この世界にも三途の川なんてあるんですね、勉強になったわ～、なんて言ってる場合か～！！はあはあ、つ、疲れた。いい加減ふざけるのはやめろ」

「あれ、ばれてたかい？駆。リイン、もうばれてるから起きなさい」

伊織がリインを、ゆさゆさと揺さぶる。

目が覚めない…、あれ？やばくね

気のせいか、伊織の冷や汗が凄いような…

「……あれ？（＾―＾；）」

「リイーン、目を覚ませー。頼むからその川を渡るなよ、リイーン！！」

その後３０分くらいしてようやくリインが帰ってきた。

「さて、何故こうなったかを話してもらおうか」

二人には正座をさせています。

「それはだね、駆。実は……言葉にできない！！え～い、回想スタート！！」

～～伊織ｓｉｄｅ～～

そう、あれは忘れもしない三時間、あれ？二時間？気絶したからな…、まあそんくらい前のことだっｔ「忘れてんじゃねぇか！！しかもついさっきだし！！」少し静かにしなさい、あとモノローグに突っ込まない！！さあ、続けるよ

「私とリインは剣の練習をしていたんだ。

なんでもリイン曰く、

「伊織様には、水、風、そして上級の光の素質があります」だ、そうだ。

それから

「伊織様は魔術に興味をもっていましたよね？なら、いまから息抜きに魔術を使ってみましょう」

なんて言うものだから、私は喜んでその提案にのることにした。

身体強化ぐらいなら最初に覚えさせられたから、少し魔力コントロールの練習をしたあとに実践することになったんだ。

そして風属性の初期魔術である『ウインド・ブレイク』を唱えてみた。

そうしたら一回目で成功してリインが「凄いです、伊織様！！たった一回で成功させるなんて、才能ありますよ」

なんて、褒めてくれるものだから調子に乗っちゃって上級魔術を使ってみたんだ。でも、使ってみたら魔力の塊？みたいなものが私の腕に集まってリインが、

「！？伊織様、危険です。早くその魔力をどこでもいいから放出してください！！」

で、言われた通りにその塊を腕から外すように腕を、ブンブンふったら…

まあこの通りになったわけだ。」

わかったかい？、と言おうとしたら駆が何かを考えてることに気が

付き言うのをやめた。
邪魔したら悪いし、こういうときの駆は相手の事など目に入らないからな。
まあ、なので駆はこのまま放置だ。
「リイン、お腹がすいちゃったから城に戻ろう」
「はい！！」
練兵場の修理は兵士達に任せて私たちは帰った。
勿論駆を置いて
〜〜伊織ｓｉｄｅ　ｅｎｄ　〜〜

〜〜駆ｓｉｄｅ〜〜

伊織の話を聞いて釈然としなかった。
聞いた限りでは魔力の暴走のようだったが、それは有り得ない！！
なぜならこの俺が解析していたからだ。
まさか、魔力の封印？それともプロテクトか？
自惚れるつもりはないが、俺の解析から逃れる封印術を造れる人なんて俺の世界でも両手の指の数よりも少ないぞ。

仮にそうだったとしても、そもそも何故伊織の魔力を封印すり必要がある？

伊織は裏には関わっていないはずだ。怪しいのはあの魔法陣だ。

どんな細工が…？

……バカバカしい、そもそもこんなことを考えても何も解決しない。

伊織が何かされていたら、相手にはそれ相応の制裁を加えるだけだ。

伊織は守るってあの人に誓ったからな…

さあ、帰ろう！！

このあと、伊織とリインがいないことに気付いて悲しくなった。

冒険８　旅に出る幼なじみとついでに俺（前書き）

後半は少しシリアスに挑戦してみました！！

冒険8　旅に出る幼なじみとついでに俺

あの練兵場事件（俺が勝手に名付けた）から一月がたった。
今では伊織は剣の腕はそこらのごろつき程度なら一撃で倒せるようになったし、魔術は暴走するようなことはなくなった。
そして、今俺達は女王に呼ばれ謁見の間に行くところだ。
「いったい何だろうね？駆」
「俺に尋ねられてもわかんねぇよ。それに俺は最近、ギルドや酒場にばっか行ってるからなおさらな」
「そうだね、最近君は私のことは放っておいているもんね」
フフフフフ、と不気味な笑い声をだす伊織。
正直怖い、てか拗ねてんのか？
「別に拗ねてなんかいないよ、フフフフフ」
「悪い悪い、でも俺にも色々あったんだって」
魔王の情報調査とか、魔法陣調べたりとか。
まったく分からなかったけどね！！

「むう、色々と言ってもたまにはこっちの様子を見るぐらいしてもいいと思うけどね」

「ん？様子はいつも見てたよ？伊織が気付かなかっただけじゃない？」

まあ、あえて見えないところから見てたんだけど。

「そうなのかい？それじゃあ私の訓練はどうだった？」

う～ん、そうだな…

「まずは武器に振り回されすぎだな。もう少し力を付けないと。魔術に関して言えば魔力の練りが甘い。魔力コントロールもまだまだだな」

「そ、そうか。まだまだか…」

シュン、という擬音が聞こえるくらいに肩をおとす。

「だけど、この一ヶ月、よく頑張ったな。撫でてやろう」

ナデナデ

「へう～／／／」

気持ち良さそうに目を細める。

だてに十七年間幼なじみをやってたわけじゃないぜ！！

俺の”撫でスキル”はもはや神の領域！！

とまあ、こんな話をしていると謁見の間の前までたどり着いた。

伊織が一歩前に出て

「”勇者”火元　伊織、参りました」

「同じく”魔術師”水元　駆、参りました」

作法はリインに叩きこまれた。

半端ないくらいスパルタで最後伊織なんか半泣きだったし…

おっと、この話は置いとこう。

「ウム、入れ」

女王から許可がでる。

テメエが呼んだんだろうが、とは口にださない。

入ってみると、玉座に女王が座っている。
周りには騎士の奴らや、宰相、大臣と城の重要人物がほぼ全員揃っていた。
もちろんリインも。
「勇者よ、今回汝を呼んだのは他でもない魔王のことじゃ」
「！！」
きたか。
「ついに魔王が動きだした。」
「ど、どういうことですか！？魔王はまだ動く気配はないとおっしゃっていたではないですか！！」
「ああ、そのことについて説明しよう。まずこの大陸がこの王国も含めた五大国で成り立っていることは知っているな？他には小さな村、ちょっとした町しかない」
「はい、その通りです。この大陸内には五大国とその属国しかありません」
「そして昨夜、五大国の一つマグダライト王国が……壊滅した」
「「「「！！」」」」

これには周りにいた人達も一部を除いて驚いている。

もちろん俺もだ。

「それも一夜にしてマグダライト王国は敗北したのだ」

「「「「……」」」」

これには声も出ないらしい。

それもそうだろう。俺もこの王国にきて一月になるがだいたいの戦力はわかってきた。

とてもじゃないが一日で壊滅させるなんて不可能だ。

よほど兵力差があるのか、あるいは魔王が強すぎたのか…

おそらく両方だろう。

だがいくら魔王が強かろうが、兵力があろうが、魔法使い級が一人では不可能。

俺の最大広域殲滅魔法でも大半の魔力を使い、国の十分の一を破壊がいいとこだ。

ならすくなくとも魔法使い級が四人、五人ほど…

まず勝てないだろう。

「これを見てくれ」

重苦しい雰囲気のなか女王が声をだす。

その手にあるのは水晶、映像を記録、投影する魔術具だろう。

そして話の流れからして恐らく…

俺の予想通りそれは映し出された。

昨夜の映像、おそらく兵士か誰かが写したのだろう。

赤、赤、赤、一面火の海となった街。

逃げ惑う人々は魔物に殺されていく。

そこらかしこに騎士達の亡きがらが転がっている、そしてその物体を食す魔物。

地獄絵図、そんな言葉がよくにあう。

「……うぇ」

誰かが嘔吐する。

それも仕方ないほどの光景。

ふと横を見ると伊織は泣いていた。泣きながら、しかし目は映像に向いたまま。覚悟を決めるかのように、拳を握りしめていた。

映像が終わる、記録していた人が死んだのだろう。

誰も喋らない、そんな中女王が口を開く。

「いまからそなた達には魔王退治の旅にでてもらう」

やっぱりか、もう、伊織にしか賭けるものがないってか、ふざけやがって…

だけどこの幼なじみは

「…わかりました。私達はいまこれより魔王退治の旅に行きましょう」

絶対に見捨てない。

一度でも知り合った、拘わり合った、そんな人達をコイツが見捨てるわけがない。

「…いいのか？」

遠回しに死ぬかもしれないぞと言っているのだろう。

それだけ今代の魔王が強いのだろう。

それだけ恐怖を与えているのだろう。

いまの映像を見たら当然だ。だけど伊織は

「はい、”私”が必ず魔王を倒すことを誓いましょう。貴方はここで、ドッシリと構えていてください」

怖いくせに、足が震えるほどに。

それでも伊織は倒すと言った。
なら、俺のやるべきことはただ一つ。
「違うだろ、伊織。”私達”だろ」
笑顔で伊織を支えてやる
それが俺に出来ること
この力で伊織を守る
それが俺がすべきこと
「……いいの？」
聞いてくる。覚悟を。
「ああ」
迷いはない。伊織は俺が守る。
魔王だかなんだか知らないが、俺の幼なじみは殺させない。

それが俺の覚悟。

それが俺の誓い

こうして俺達は旅にでた。

冒険8　旅に出る幼なじみとついでに俺（後書き）

ようやく旅に出せました…

無理矢理すぎたかな

冒険9　今度こそ旅に出た幼なじみとついでに俺（前書き）

最近リアルの方が忙しいので更新が遅いです・・・

頑張りますので感想ください！

冒険9　今度こそ旅に出た幼なじみとついでに俺

ええ、駆です。

前回旅に出たとか言ったが旅に出るからには、いろいろと準備が必要なわけで…

まだ、城にいるんです。

ええ、わかってますよ。

前回”旅に出た”と言ったのだから。

なんでまだいるんだよ、みたいな感じだね。

さっきも言ったが準備が必要なんだ、準備が。

武器、防具、薬、非常食、ｅｔｃ…金ならこの一ヶ月で随分貯まったからね。

もう、ありすぎて困ってるくらいさ。

だから湯水のように使ってますよ。

はい、嘘です。

これからも旅は長いから節約しますよ、節約。

考えながらも手は止めてません。

だからもう荷造りができちゃった。

空間の魔法四次元ポケットのような空間を造りだし、そこにいれてます。「伊織、まだ終わらないのか？」

「仕方ないだろ。男の子と違って女の子は荷物が多いんだ」

あれ？リュックサックみたいなのに入れてるな、

「伊織、これに詰め込め」

四次元ポケット（仮）を差し出す。

「はあ？こんなものに入るわけ……入ったね」

「まあ、中は四次元だし」

伊織が「最初から言ってよ」と言った気がするけどきのせいだ、うん。

次は、武具の点検をしよう。

伊織

胸当てとガントレット、脚部等、必要最低限の装備だが魔術的な加護がついているので防御力は高い。

ちなみに値段も高い。

俺

私服

……あれ？差が激しくない？私服って、ちょｗｗｗ

まあ、防刃、防弾がついていて対魔術は最高レベルなんだけどね。

それでも私服って…

気にしない、気にしない。

「さて、伊織？準備は整った訳だけどまずは何処に行くんだ？」

「まずは隣国で同盟国でもあるリバイバル王国に行く予定だよ」

言ったと思うがこの大陸は五つの大国によって統治されている。

先程伊織のいったリバイバル王国ここクロムウェル王国から東に位置していて商業力が高く、世界中から商人が行商を行っている。

また、ここクロムウェル王国も商業力が高い。

そしてリバイバル王国よりさらに東に行くと軍事国家、ガロン帝国となる。

その名の通り非常に軍事力が高く、五大国の中でも頭一つ抜きでている。

ガロン帝国を南に行くと、様々な種族が共存するレリジオン共和国が存在する。温暖な気候で魔物のレベルもさほど高くない比較的安全な国である。

最後に今は亡きマグダライト王国。

特筆するものはあまりないがバランスがよい国である。

話が逸れたが、まだまだ未熟な伊織の修業と国民、兵隊の士気高揚を狙っているので同盟国のリバイバル王国から行くことになったのだ。

「オッケー、じゃあ一ヶ月過ごしたこの街最後の思い出作りをするから一時間後に城門集合な」

「うん、わかった。私も女王とかお世話になった人達に挨拶してくるよ」

そういって俺達は別れた。俺も挨拶回りに行くことにしよう。

主に酒場のマスターとか、女王とか、酒場のマスターとか、ギルドの受付のおねぇさんとか、酒場のマスターとかにね！！

・・・・・

一時間後、本当に酒場のマスターはいい人だと再認識した俺は城門へむかう。

おっ！もう伊織がいる。はやいな～って、伊織の他に誰かいるなぁ・・・

リイン？リインじゃないか！
なんでいるんだろ？
まあ、とりあえず走るか。

「おーい、伊織～」

声をかけたらこちらに気付く二人。

「駆～！早く、早く～」

そう急かすなよ、と呟きながら俺はさらに早く走る。

「ふぅ、わりぃ、わりぃ。少し遅くなったな」

「ううん、私達もいま来たところさ。ね、リイン？」

「ええ、ついさっきですよ」

そう？それならよかった

「ところでなんでリインがここにいるんだ？」

そういうと、リインはがーんと言いながら膝をつく。

なんで？

「ひどいよ、駆。リインがここにいたらいけないのかい？」

そんなこと言ってないだろ！

純粋に疑問に思っただけだ。

「そうかい？ならいいんだけどね」

くっ、腹立つなコイツ。

「それはそうとリインも旅に着いて来ることになったから」

割と重要なことをサラッと言うね、お前。

「はい！これはこの国の、いえ、この世界のピンチなのにお二人だけに任せるのはおかしいです！」

それは俺達が信用できないっていうこと？

「違います！わたしはお二人の力になりたいんです！」

俺はリインの目を見詰める。微量の威圧感を醸し出しながら。

それでもコイツは目を逸らさない。

その目に、濁りはなかった

「覚悟ができてるならなにも言えないな」

「！それじゃあ！」

「ああ、改めてこれからよろしく。リイン」

「はい！」

俺達はどちらからともなく握手をしようとする。

だが

「てい！！」

それを許さないやつが一人いた。

伊織だ

伊織は物凄くいい笑顔で俺に「ちょっとまって」と一声かけ、リインを連れ少し離れていった。

そして何か耳打ちしたかと思うと、リインが震え上がりぎこちない動きで俺の元へ帰ってきた。

「あ、あああ改めてよろしくお願いします。カケルさん！」

明らかになにかにびびってる。

なんだ！なにをしたんだ、伊織！

問いただそうとしたがあのいい笑顔の前にびび…見惚れて質問をやめた。

「さあ、行こうよ！二人とも！」

こうして今度こそ間違いなく俺達は旅に出たのだった。

ただその日、一日中伊織がいい笑顔でリインが終止びびっていてなんか変な空気だったことをここに記しておこう。

冒険１０　迷いの森の幼なじみとついでに俺１（前書き）

・・・すいません

弁解の言葉もないです

今度はなるべくはやく更新できるようにがんばります

感想おねがいします

冒険１０　迷いの森の幼なじみとついでに俺１

首都から出た俺達はリバイバル王国を目指すために歩いていた。クロムウェル王国からリバイバル王国に行くには村を二つ、町を三つ通らなければならない。
それだけならばいいのだが、その間には≪迷いの森≫と呼ばれるテンプレ通りの森があるのだ！

つまり何が言いたいのかというと・・・

「・・・・・・迷った」

しかも二人とはぐれちまったし・・・

えっ？！　どうしてそうなったって？仕方ないな、回想で説明しよう！！

回想スタート

あれ？回想スタート！

――――回想――――

それは首都から旅立って一週間経ったある日のこと。

「疲れた～」

「疲れましたね～」

二人はいつもどおり不満をもらしながら街道を歩いていた。
なにせ歩いていくだけならまだしも気を抜くといきなり魔物が現れ攻撃してきたりするのだ。
この一週間で野宿に慣れ、魔物にも慣れたので最初よりはマシになったが・・・

「リイン、次はどっちだ？　右か？左か？」

分かれ道のたびにいちいち聞くことにも慣れた。先頭は俺なので聞くのも俺だ。

「え～と・・・・・ここは左ですね」

俺は「そうか」と答えるだけですぐ歩き始める。
あまり待ち続けると二人の疲れたコールが流れるからだ。
まったく、危険な旅だということをこいつらは理解してんのかね？

そんなことを思いながら歩いていく俺たち。
てか、あれ？なんか周りの風景がどんどん道から外れていってる気がするんだが・・・・・

「おい、リイン！ホントにこっちで合ってんンか？」

俺は振り向きながらそう聞いた。
するとリインは冷や汗を掻きながら

「あれ？おかしいな。確かにこっちの道で、あっ！！」

そこで驚愕の声を上げるリイン

「っておい、あっ！！ってなんだよ」

ここでミスしたのか、コイツは。どうやって地図を見間違えるんだよ。

「たくっ、仕方ねえ。元の道まで戻るぞ！」

俺がそう声をかけると

「やれやれ、分かったよ」

「ふええ～～、すいませ～ん」

などと言いながら付いてくる。
たぶんさっきリインに道を聞いたところで間違えたんだろうな。
案外近いしすぐに着くだろ。
そんなことを考えながら歩くこと五分ほど、俺たちはあの分かれ道まで帰ってきていた。
そう、この時点では俺たちと思っていたのだが再び道を聞くために後ろを振り向いた俺は絶句した。

―――二人がいない。

あろうことかあの二人、迷子になりやがったのである。
当然俺は慌てて捜したさ。それこそ来た道を走りぬけるくらいにな！
もうわかったと思うが言わせてもらおう。
――――――――俺も迷ったのだ。

で、ここらへんで冒頭に戻る、と。

「たくっ、あいつらどこに行ったんだよ」

俺は愚痴を言いながら森を彷徨う。
そりゃもうこの一週間で味わった苦痛を全て曝け出す。

「だいたいあいつら、不注意すぎんだよ。この前だって魔物に後ろを取られてたし、あ～、クソ！次の町に着いたら稽古一（という名のいじめ）つけてやる」

と、延々続くかと思われた愚痴を止めたのは

「きゃあーーー！！」

という女性の悲鳴だった。

「・・・・・・どうしてこう俺は運がないんだ。クソ、もう自棄だ。」

言い終わる同時に俺は魔力による脚力を中心に身体強化をかける。
そして前方にある木々に当たらないように微弱な防御壁を作る。
そうすることによって俺の３ｍほど手前で木が折れていく。

そうして数秒ほどかけて悲鳴の発生地に到着する。
そこは少し木々の開けた場所で広場のようになったところだ。
その中心にあるのは二つの人影。

片方は小学生くらいほどの背丈しかない少女。
もう片方は対照的に３ｍを超すかと思われるほどの巨体。

少女は涙目になりながら腰を抜かし、それでも目の前の魔物から逃れようと後ずさっている。
その目の前の魔物はおそらくは鬼と呼ばれる魔物だろう。

―――鬼
鬼というのは元の世界にも多々伝承などがあり、日本の代表的な妖怪だった。
この世界では主に中級から上級に位置する魔物であり、世界有数の凶暴な魔物だ。
上位になればなるほど単純な戦闘力はもちろん知能も上がり人語を

解する個体も確認されている。
と、リインから聞いた。
と、とにかく危険な魔物なのである。
故にあのようなか弱い少女では一溜まりもないだろう。
ただ、手に持った棍棒を一振りすれば片がつく。
だが俺はそれを許すわけにはいかない。
俺は今出せる最高のスピードで鬼に近づく。
「ブォ！？」
鬼は突如現れた影に動揺するも、手に持つ棍棒で迎撃を試みる。
ブオン！
なんの技術も無くただ横に棍棒を薙ぐ。
凄まじい速さで放たれたソレは魔力によって強化された俺の目には止まって見える。
俺はただ、拳に魔力を集中させ力を込めるだけ。
「遅え！」
腕を振り切った状態の鬼にはその拳を避けることは叶わない。
その強化された拳は鉄をも砕く。その拳を喰らってただで済むはずはなく、
ドゴオオ！！

と、とてつもない大きな音を出しながら、周りの木々をなぎ倒しながら鬼は転がっていく。
だが、やはりそれだけで終わるはずもなく

「グガアアア！！！！」

鬼は怒りの咆哮をあげる。
それは食事を邪魔されたことか、それともただの人間に吹き飛ばされたことへの怒りか。

俺はそれを見ても冷静に右手を鬼い向ける。

『燃えろ』

そう一言呪文を唱えるだけで鬼の体は炎に巻きつかれる。

「！？　グ、グガアアア！！！！」

鬼は体に巻きついた炎を払おうとその場に転げまわる。
しかしその炎は俺の魔力によって出来た炎。
そんなことで消えるはずもなく、鬼は静かに命を落とした。

鬼を倒した俺は後ろの少女に声をかける。

「ふう、大丈夫か？」

少し呆然としているが目立った外傷はないし平気だろと思い少女を見ていると少女がハッとしたように俺を見る。そして一息ついてこう言った。

「お願いします。私の村の人たちを助けてください！！」

・・・決定、今日は厄日だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8399l/

勇者な幼なじみと魔法使いな俺

2011年9月1日19時56分発行